



カメラマン：山田新治郎(表紙、並びに当ページ)



1872(明治5)年に完成し、同年操業を開始した富岡製糸場。生産される生糸は海外で高く評価された。1987(昭和62)年まで稼働するも、製糸業の衰退を背景にその歴史に幕を下ろす。写真は東置藪所。明治期における建築技術の萌芽を今に伝える貴重な建築遺産である。

## 富岡製糸場

群馬県富岡市富岡

明治維新後、富国強兵を目指す政府は輸出による外貨獲得の基幹であった生糸の生産力増強を推し進める。その官営模範製糸工場として建設されたのが富岡製糸場である。全長一四〇メートルの繰糸所には三〇〇釜の繰糸器が並び、当時としては世界最大規模の製糸工場であった。

建造物の設計は横須賀製鉄所の建設に携わったフランス人技術者、オーギュスト・バステアン。その図面を基に日本人の大手、職人たちが存分に技量を振るった。構造は木製の骨組みに、壁として煉瓦を採用した木骨煉瓦造。煉瓦は長手と小口が交互に並び、意匠性にも優れたフランス積みで積み上げられた。煉瓦はフランス人技術者が、埼玉県深谷市から招集した瓦職人に焼成を教え、近隣に窯を設置して屋根瓦などとともに焼き上げた。更に目地はセメントの代替として、群馬県下仁田町で採取した石灰を原料とする漆喰と砂を混合した材料が使用されている。

日本初の機械式煉瓦工場である深谷市の日本煉瓦製造(株)が設立されたのは、この製糸場が操業を開始した後、一〇年あまりを経たころだ。富岡製糸場は、まさに、日本におけるレンガ建築の嚆矢ともいえる建築物のひとつである。